Memoirs of Beppu University, 46(2005)

木に託した人々の夢とヴィジョン

―トリスタン伝説の場合―

井　上　富　江

はじめに

今回ぜひとも木々のイメージを分析することで、人々が木に託した夢とヴィジョンを描いてみようと決めた。

木々はまずその姿によって、天と地を結ぶ存在であり、天に枝を広げれば広げるだけ、地下にもその地下茎を延ばしつづける。地下水を汲み上げ、幹を伝って上昇する力は雄々しくもたくましく、限りなく天に近づこうとする姿は健気であり、美しいものでもある。春、その花は見る人を和ませ、しっかりと枝を張った葉ごもりは、夏人々に涼しい影をつくり、繁栄を約束し、木々によっては、秋の収穫の楽しみもある。薬用に使用される草木もある。我々が今問題にしようとしているトリスタン文学を育んだ、中世という時代、ヨーロッパは深い森に覆われ、ドルイド僧たちが人々の生活のなかに密着しながら、森を舞台に縦横に活躍していた。そのことを考えると、幾つかの植物をテーマにした分析は既にあるのだが、先人たちの足跡をたどり、また新しい視点をくみたててみることも意味のないことではないと思う。順を追ってトリスタン　イズーの様々な編の様々な場面においてどのような夢やヴィジョンを人々は木に託したのかを見てみたい。

Ⅰ　固い愛の絆

わたしたちはまずトリスタンといえば、かのマリ　ド　フランスの「すいかずら」を一番に思い浮かべるであろう。何故はしばみで何故すいかずらなのかということは問わず、ただ「あなたなくして私なく、私なくしてあなたなし」という固い絆を表すのに、このすいかずらとはしばみの結びつきほどふさわしいものはないと考えている。

D'els dous fu il tut altresi
cume del chievrefueil esteit
ki a la coldre se perneit :
Quant il s'est laciez e pris
e tut entur lefust s'est mis,
ensemble poeent bien durerr
Mes ki puis les vuelt desevrer,
La coldre muert hastivement
E li chievrefueilz ensement.
'Bele amie, si est de nus :
ne vus senz mei ne jeo senz vus!'

Ils étaient tous les deux
comme le chèvrefeuille
qui s'enroule autour du noisetier :
quand il s'y est enlacé
et qu'il entoure la tige,
ils peuvent ainsi continuer à vivre longtemps.
Mais si l'on veut ensuite les séparer
Le noisetier a tôt fait de mourir,
Tout comme le chèvrefeuille.
"Bele amie, ainsi en va-t-il de nous :
ni vous sans moi, ni moi sans vous!")

(Marie de France, Chievrefueil, v.v 68-78)'

（私たち二人は、あたかもはしばみの木にからむ
すいかずらのごとくであります。
もしすいかずらがまとわりついて、
はしばみの幹のまわりを伝えば、
ともに永らえもしましょうが、
もし二つを引き離すのであれば、
はしばみはすぐにも枯れはて、
すいかずらも同様の運命をたどるでしょう。
「恋人よ。私達とて同じこと。
私なくしてあなたなく、あなたなくして私なし。」）

人々の「永劫不滅の愛」という夢を載せて描かれるこの２つの植物の結びつきは、この詩節によってなるほどすばらしい表現であると納得することであろう。しかしここで、はしばみとすいかずらがなぜこの死をもっても分かつ事の出来ない強い愛を表すことになるのか、今いちど考察してみることにしたい。

はしばみはしっかりと大地に根を下ろし、たくさんの実を秋に約束する豊穣のイメージと強く結びつくものである。またすいかずらのかぐわしい香、可憐な小さな花、森のどこにあっても、道ばたにあっても、人々を引き寄せるこの香りとしっかりとはしばみの木の幹に寄り添い巻き付いている姿は、誰しもこの両者の関係を納得させるイメージを有している。

しかし、はしばみにはまた別のイメージもある。「灰かぐら姫」のはしばみの木を思いだしてみよう。早くに母を亡くし、まま母に育てられることになった不幸なこの女の子を、はしばみの木になった、亡き母は、ひろげられるだけ腕を広げ、その広げた枝でわが子をかばおうとする。そのけなげな姿。その姿こそ、自分がマルク王の妃にと望み、イズーの幸せを願っていたにもかかわらず、運命の歯車が狂ってしまったために、彼女を不幸にしてしまったという悔恨と憐憫から、一生懸命に命を賭して、イズーをかばおうとするトリスタンの姿そのものではないだろうか。

そしてまた、はしばみはドルイド僧たちにとっては７つの神聖な木の一つである[2]。ドルイド僧たちの使う杖、これを作るのに使うのもこのはしばみの木だった。はしばみは彼らにとって、まず７つの神聖な木々の中でもとりわけ大切な木として捉えられていたからである。ドルイド僧たちの使う杖、これは彼らの権威を表すものであり、呪術の道具であり、不思議な予言者としての力の源泉でもあった。この杖を振って呪文を唱えるドルイド僧たちのイメージはわたしたちにとって非常に馴染み深いものではなかっただろうか。アイルランドの王にマッククイルという神秘的な王がいるが、この名前は「はしばみの息子」という意味である[3]。ただしこの場合のはしばみは noisetier ではなく coudrier の方なのだが…

また「すいかずら」の中には次のようなシーンもある。

Le jur que li reis fu meûz	Le jour du départ du roi,
est Tristram el bois revenuz	Tristan revient dans la forêt
sur le chemin que il saveit	sur le chemin que le crtège
que la rute paser deveit	doit emprunter, il le sait.
Une coldre trencha par mi,	Il coupe par le milieu une baguette de noisetier
tute quarree la fendi.	qu'il taille pour l'équarrir.

quant il a paré le bastun,
de sun cultel escrit sun nun.
Se la reîne s'aperceit,
ki mult grant guarde s'en perneit,
de su ami bien conuistra
le bastun quant el le verra :

Sur le bâton ainsi préparé
il grave son nom avec son couteau.
La reine est très attentive à ce genre de signal :
si elle aperçoit le bâton,
elle y reconaîtra bien
aussitôt un message de son ami.

(Marie de France, Chievrefu eil. vv.47-58)[4]

(マルク王が出立する当日、トリスタンは森の中に入った。
一行がたどるに違いないとかねてより心得ていた道の傍らで、
はしばみの木を半ばから伐り、その幹を四角に削いだ。
そして杖に削りあげると、彼は自分の名前を短剣で刻んだ。
もし王妃がこれに目をとめ、仔細に注意を払ってくれたら、
かって同じようにして、この自分に気付いたことがあったように、
彼女は一目見るなり、恋人の杖であると認めるに違いない。(vv.47-58))

私たちはここで思いだすであろう。はしばみはドルイド僧たちの言葉を刻む木でもあったことを。なぜならば、はしばみはドルイド僧たちにとって、「知恵」を意味する木であったのだ[5]。オガム文字で幹に刻まれた彼らの言葉は、ドルイド僧たちの森の中での貴重な伝言手段であったのだ。

トリスタンがイズーへの伝言を人には知られずこのはしばみの幹にしたためたのも、単なる偶然ではないということが、理解されるであろう。ケルトの幻影が色こく残るこのトリスタンの物語りにあって、丹念に削られたはしばみの木に刻まれた彼の名前はトリスタンの切ない恋情と募る思いを伝える夢であった。

また一角獣や妖精たちが、巨人によって守られる聖なる泉をぐるりと取り巻くはしばみの木々の下にドルイドの女官たちと一緒に身を寄せる姿も思いだされる。また、はしばみの実はこれもまたドルイド僧にとって、聖なる魚である鮭を養う大切な実でもあった。秋たくさんの実で鮭を育てるはしばみは、人々にとって、大切な木でもあった[6]。

はしばみはただ聖なる木であるだけでなく、知識の伝達手段であり、人々の憩いの場所なのである。中世の人々にとって、この木はそれほど身近であるばかりでなく、役にたつ木でもあったのだ。この木をすいかずらに重ね合わせて描いたこのイメージは人々の夢を綴る一幅の美しい絵巻物の一場面だといえよう。

Ⅱ－1　運命の歯車、植物に託されたヴィジョン

さて今我々はベルール、トマ、アイルハルト、ゴットフリート、サガの描く「トリスタン、イズー物語」に入ることにしたい。この物語群を一まとめにするなんてまったく気狂い沙汰だと思うかもしれない。しかし、ベルール、トマの物語りがその断片のみしか残されていない関係上、アイルハルト、ゴットフリート、サガにまでひろげなければならないことは自明の理であろう。

この物語り群の根幹をなすフィルトル vin herbé はそもそもどういうものだったのだろうか。

中世において、薬草は必ずサンジャンの祭りの日に摘むこととよく言われる。これは花をつけるこの時期の草木には特別強力な効力が秘められていると信じられていたからである。イズーの母、アイルランド王妃である暁のイズーは、娘黄金の髪のイズーとマルク王の完全なる肉体的な合一を願って、結婚式の前夜に飲むように、この薬草入りの飲み物（vin）を用意する。これに

は３年の効力が決められていた。
ベルールの中では次のように描かれている。

L'endemain de la saint Jehan	Le lendemain de la Saint Jean
Aconpli furent li troi an	furent révolus les trois ans d'effet
Que cil vin fu determinez	qui avaient été assigné au breuvage.[7]
	(Béoul vv.2147-2150)

サンジャンの祭りの翌日
飲み物に定められていた
三年が過ぎ去った

即ちサンジャンの祭りに摘まれ、飲み物にされたフィルトル vin　herbé がその日に飲まれたので、サンジャンの祭りの翌日にはその効力が切れたというわけだ。ベルールとアイルハルトの物語では、イズーの母は３年もすれば、マルク王とイズーの仲も安泰であると考えたのであろう。もちろんトマの場合には、彼らの愛はそのようなフィルトル vin　herbé のせいではなく、そもそも彼らが出会ったその時から少しずつ愛が芽生え、イズーが看病するうちに決定的に愛しあうようになってしまった関係であるので、その効力の期限はない[8]。ともあれ彼らの不幸はこのように準備されるわけなのだが、激しい恋に酔うこと自体、そもそも狂気と捉えられていた中世にあって、死を持っても分かつことのできない愛を描くこと自体、ドルイド僧たちの掌の中で繰り広げられる夢にしか過ぎないのかも知れない。後のシェクスピアの作品「真夏の夜の夢」は何よりもこのイメージを受け継ぐものと言えよう[9]。

さてこの物語りの山場をなす、ピンとはった緊張の糸で描かれるシーンの一つを見てみることにしましょう。ベルールの例の大松のシーンである。

Com ele aprisme son ami,	Ecutez omme ele prend les devants,
Oiez com el l'a devanci :	tout en s'apprant de son ami
"Sire Tristran, por Deu le roi,	"Par Dieu qui créa l'air et la mer,
Si grant pechié avec de moi,	ne me faites plus venir à des rendez-vous
Qui me mandez a itel ore!"	comme celui-ci!
Or fait senblant con s'ele plore.	Elle fait alors semblant de pleurer. (Béroul vv.3-8)

Li rois qui sus (enl'arbr) e estoit	Le roi qui se trouvait là-haut dans
Qut l'asenblee bien veûe	l'arbre avait bien vu la rencontre
Et la raison tote entendue.	et entendu toute la conversation.
De la pitié qu'au cor li prist,	A cause de la pitié qui s'insinuait
Qu'il ne plorastne s'en tenist	dans son cœur, il n'aurait retenu ses larmes pour rien au monde.
.....	
Por nul avoir ; mout a garnt duel,	Il éprouve une grandeaffliction ;
Molt het le nain de Tintaguel.	Et il est plein de haine pour le nain de Tintagel. (Béroul vv.258-264)[10]

イズーが恋人に近付いたとき、
お聞き下され、どのように先手を取ったかを、、
「トリスタンさま、この世の王たる神にかけて、
随分罪深いまねを私におさせになりますこと、
このような時刻に呼び出したりなさるとは！」
そこで彼女は涙を流す振りをする。(Béroul vv.3-8)

. . . . . .

木の上に潜んでいたマルク王は
ふたりの出会いの一部始終を見届け、
交わされた言葉の全てを耳にした。
不憫の情に深く心動かされて、
何があろうとも、涙の溢れ出るのを
禁じ得ないほど、心中いたく悲しみ、
ティンタジェルの小人をたいそう憎む。

以上の引用シーンでは言及されなかったのだが、後にブランジアンに王自身が語るシーンのなかに、彼は小人によって松の木に登らされたことを明らかにする。この松が pin maritime であったか、pin parasol であるのかそれともまた別の松なのかについては一切明らかにはいない。ベルールがアンリ２世とエレオノールの宮廷に関わった詩人であろうということは、ほぼ明らかなことらしいので、イギリス側とフランス側で、彼にはどちらの松も見る機会は充分あったと考えらる。

このシーンでは王一人が彼の妃と甥の逢い引きを見張る役割をする。彼は小人と一緒には登っていない。むしろ小人は一人自分の描いたシナリオどうりに三人が行動し、その結果修羅場が演じられることを確信し、その場面に大勢の証人を率いてかけつける場面を想像し、遠くからこの場面を星の動きでしっかりと見張る。彼のたてたシナリオが次々と演じられていく結末を想像し、ほくそ笑んでいたのだった。折から月光が泉に松の影とその枝にいる王自身の影を映し、トリスタン、イズー両者はその影を発見する。彼らは間一髪で、罠をしかけられているのを知る。もしここで、怪しい振る舞いをして、王の疑いを晴らすことができなければ、自分たちの命が風前の灯火だということを知る。果樹園の一角に立つこの松の枝のシーンは、はからずもあの創世記で描かれた、楽園を追われる直前の恋人たちのイメージそのものなのだ。その木の横に泉があり、そこから小川が一本流れているこのシーンはまさに楽園のイメージである。佐々木茂美氏も「ペルシャ語で、Paradis すなわち天上の楽園を意味し、12世紀に地上の楽園を意味するようになった。」とその論文にも書いている通りである[11]。泉に写る王のイメージは、「妃を信じたい、甥を信じたい。しかし悪人どものいうことも本当かもしれない。」という、揺れるその心をゆらゆらと水面に写し、我々に伝えてくれる。小人は遠くからこの３人を惑星の動きを読むことで、見張っているのだが、王の心を掌握し、王国を我が意のままに動かそうという夢は松の枝の陰に隠されている。木々は彼の陰謀を写すものとして大きなドラマを我々に語る一方、王はここで自らの疑いをできれば晴らしたい、小人や家来とはいえ、悪人たちの企みに踊らされるのではなく自分の行動を信念を持って成し遂げたいという主君としての強い権力と意志を、我々は松の太い天までのびた木の中に見ることができる。松はデュオニッソスが松かさを王杖のかわりに持っているのを思いださせるものだが、王杖は君主の強い権力の象徴であり、松かさは植物の生命の永続性を表すものでもある[12]。と同時に豊穣の女神キュベレに深く愛されたにもかかわらず、自ら

はニンフを愛したために彼女に憎まれてしまうアッテイスの話を思いだすであろう[13]。

この神話によって、彼は松の姿で表されている。松はこうして、切り倒されても春とともに再生する神のイメージをもつものでもあった。その常緑の緑故に不老不死、生命力のシンボルとして描かれることも多い。真直ぐに天にのびる姿はマルク王の強い意志を表すものであるということも納得できるであろう。この場面の松のイメージはまさにあの「ローランの歌」のガヌロンが異教徒にあわや切り殺されようかという時の、あの切迫した場面と同じである。
使者としてマルシルのもとに行ったガヌロンからシャルルマーニュの書状を見せられたマルシルがその文面に烈火のごとく怒り、その息子がガヌロンを斬り付けるあのシーンである。

Quant l'oït Guenes, l'espee en ad branlie ;
Vait s'apuier suz le pin a la tige.[14] (Chanson de Roland vv.499-500)
この言葉を聞くや　ガヌロン、剣を振り回し
松の木の根本に走り、向きを背にして身構える。

上の引用が示すように、向きを背にしてすっくと立ったのが松の木であった。あの松の木もここのマルクと同様に使者として、シャルルマニュの王国を背負った気概と騎士の誇りが雄々しい松で見事に表現されていた。

そしてこのイズーを呼び出すためにトリスタンが用いた木はもちろんはしばみの木であろう。泉から流れ出る小川はトリスタンのイズーとの愛の語らいの夢を載せ、イズーの部屋に流れていく設定なのだが、恋人たちの通信手段としては本当に美しい夢を与えてくれるシーンである。

Ⅱ－2　夫婦和合の夢と愛の理想

一方アイルハルトの同じ場面ではどうなっていたのだか。彼の中では、何とつぎのように書かれている。

Und in wÿset an die stat,
Do du lind e bÿ dem brunnen stund.
"ich sag uch, herr, waß Ir tund",
daß clain gezwerg so,
"wie haben kain ander verbergen jo,
.....
.....
wann stigt uff disen bom.
Da sull wir namen gon,
Waß hie geschech von disen zwain.

Ce dernier lui montra l'endroit
où le tieul se dressait près de la fontaine
"Je vais vous dire, Seigneur, ce que vous ferez."
dit le nian odieux,
Nous n'avons pas d'autre cachette :
Vous devez monter là-haut
et garder le silence.
C'est de cet arbre-là
que nous observerons
"ce que ces deux-là ferons."
(Eilhart, l.l.3462-3471)[15]

後者（小人）は泉の近くに菩提樹が枝をのばした
場所を彼に見せます
「陛下、私はこれからあなたさまがなさることをもうしあげます。」
と醜悪な小人がいった。
「私どもには他に隠れる場所がありません。
あなたさまはあの高いところにお登りになり

沈黙を守っていただかなければなりません。
私どもがあのお二人が何をなさるかを見張るのは
この木からなのです。」

マルク王が登るのは菩提樹の木で小人と２人で枝に登ることになっている。
このシーンは一体何を物語るのでしょうか。何故菩提樹なのでしょうか。ケンタウロス族のケイロンの母親はギリシャ語で菩提樹という名前で、人間に常に幸せをもたらせるといわれた。またオヴィデイウスの「転身物語」で、貧しい身なりをしたジュピターとその孫アトラスがある村を訪ねた時、千軒もの村人が扉を閉ざしたにもかかわらず、ただ一軒ピレモンとバウキスの老夫婦は、彼らを暖かく迎え、座らせ、暖かいものを与え、ゆっくりお休み下さいと心から歓迎した話が思いだされる。神々の一族は皆この老夫婦の家に来て、暖かい食べ物をふるまわれた。彼らの優しさと夫婦の仲のいいことに感動した神々は彼らを神殿の番人に任じ、彼らの死後その神殿を覆う２本の木（ジュピターの木である樫の木と菩提樹に覆われていたのだが）のうち、彼らを菩提樹の木に変えたという[16]。以後菩提樹は夫婦愛の象徴として語り継がれることとなる。ドイツでは恋人たちの愛の木としてよく引用されるようでだが、少なくとも中世のこの時点ではオヴィデイウスの転身の方がより人々の夢を語るにふさわしいと思われる。マルク王はイズーとの真の愛を探し求め、菩提樹に登ったのであろうか。水に写る小人と王の２人の影はマルクと小人の葛藤を写し出し、泉を隔てて必死に繰り広げられるイズーとトリスタンの迫真の演技が水に木霊して、月の光りと相まって人々にこの上ない幻想を提供したことであろう。菩提樹はまた中世の人々にも現在と同様に薬用にも用いられてた。花の時期に取って乾燥させた葉の香しいかおりは、誰の家にも保存されていたことであろう。ヨーロッパの庭にはどこにも見られ、とりわけドイツではいたるところで見られると言われる菩提樹をアイルハルトがこのシーンで使用したのは充分納得されることであろう。
一方ゴットフリートのなかではこの同一シーンはどうなっていたのあろうか？
次の引用を見てみよう。

メロートはその場を去り早速マルケ王のいる森へ騎行した。そして王に真相を突止めたと言って泉のほとりで起こったことを告げた。
……
……（中略）王は自分自身の心痛となることを探るために、メロートと一緒に出かけた。２人が夜分、果樹園に来て、自分の仕事に取りかかった時、王にも小人にも、待ち伏せに適当と思われる隠れ場が一つも見つからなかった。その時泉が流れ出ているところに、背は低いが相当枝の張ったかなり大きなオリーブの木が立っていた。２人は苦労して樹に登り、その上に座ってじっと黙っていた[17]。

ゴットフリートはこの場面にオリーブの木をもってきた。
ほどなくトリスタンは日が暮れると、こっそり出かけ、果樹園に入ると使者となる木片（この場合はブランゲーネはオリーブの木片を使い、片方にはT，もう片方にはIと２人の頭文字を入れておくように指示している。）を流し、泉のオリーブの木の影がさしてあるところに来る。折からの月影で図らずもマルケ王とメロートの影を見つけることになるのである。
オリーブの枝は本来それほど大きくなる木ではなく、実をとるのに枝々が下がった状態に於かれていることも多いのだが、ここではあえて大きな樹という設定になっている。この樹の中に２

人も隠れる事自体大変困難をきわめるはずだし、普通のオリーブの木に２名も同じ枝にのったとしたら、トリスタン、イズーの両名に発見される前に泉に落ちてしまっていたはずだ。しかしこんな無理をしてまでゴットフリートが菩提樹も松も使用しなかったのは、トマがそうしていなかったせいなのか、今となってはその真の理由は知ることはできない。我々はオリーブの持つその意味を探ることしかできない。残念ながらケルトの珍重した木々のなかにはオリーブは見られない。ドルイド僧たちがオリーブを持って森を歩いた姿も、私が調べた範囲では残されていない。

良く知られているのは、旧約聖書にあるノアの方舟の中の次のシーンではないだろうか。

Au bout de quarante jours, Noé ouvrit la fenêtre de l'arche qu'il avait faite et lâcha un corbeau Celui-ci sortit allant et revenant jusqu'àce que les eaux fussent séchées de dessus la terre. Puis il lâcha d'auprès de lui la colombe, pour voir si les eaux avaient diminué de la surface du sol. La colombe ne trouva pas d'endroit où reposer la plante de son pied et elle revint vers lui dans l'arche.....Il attendit encore sept autres jours et recommença à lâcher la colombe hors de l'arche. La colombe vint à lui, au temps du soir, et voici qu'en sa bouche il y avait une feuille d'olivier toute fraîche. Il attendit encore sept autres jours et lâcha la colombe mais elle ne revint plus vers lui[18].

40日後ノアはかねてつくってあった方舟の天窓を開きカラスを放った。カラスは水が地の上で乾ききるまで行ったり来たりした。ついで彼は地表から水が本当に引いたかどうかを見るために鳩を放った。しかし鳩は足を休める場所を見つけられなかったので、ノアのところに帰って来た。．．．．．．．．．．．．．．．．彼はもう７日間待った。そして改めて方舟から鳩を放った。夕方鳩が帰って来た時、身よ。その嘴には新しいオリーブの葉をくわえていた。彼はもう７日待った。そして鳩を放ったこんどは鳩は彼のもとへ帰ってはこなかった。

ノアは40日後カラスを放ち、水が充分地上で引いてしまっているかどうか知るためについで鳩を離した。鳩は最初は羽を休める場所を見つけることはできず方舟に帰って来るが、47日後２度目に放たれた時、彼は嘴に新鮮なオリーブの葉を加えてき、その後、方舟には帰って来なかったという。洪水の後ノアにもたらされたこのオリーブこそ安らぎの土地の印であり、平和の土地の証でもあったのだ。またギリシャではこの樹はアテナに捧げられた樹だった。最初のオリーブの樹は、アテナとポセイドンの諍いから生まれたものだったのだ。今日アクロポリスの上にあるのはその子孫であり、アテナをあらわすまさに聖別された樹だったのある。

このようなオリーブをあえてここに持ってきたゴットフリートは少なくともここで、血なまぐさいシーンを描こうとしているとは思えない。できれば、目の前で繰り広げられる妃と甥の展開に、たとえ何がおころうと、穏やかにすませたいという心の中がこの樹に託されたように思えてならない。マルケ王がここに描くのは、妻と心静かに、誰に邪魔されることなく、悪人の策略など撥ね付けるだけの確信を持って過ごしたいという夢であったはずだ。メロートはここでも自分の罠に、始め２人の恋人たちがうまくひっかっかてくれたと、これからの展開に自分なりの幻想を思い描いていたに違いない。マルク王はもう自分の手の内にある。これからは自分の言う事は何でも御取り上げになるに違いない。マルクの王国はもう手中にあるに等しいと…。しかしトリスタン、イズー２人の機転により、オリーブの予言どうり、平安のうちにこのシーンは幕を降ろす。マルケ王は心無い悪人の虚言を信じた自らの不明を恥じ、小人は自らの予言がまったくの偽りであることが露見した悔しさに胸をかきむしられながら…各々が帰っていく。恋人たちは危機を脱出することができたことに安堵の胸をなで、これからの２人の生活、即ち正々堂々とマルク

王の公認のもとに一緒に暮らせ、密かにであっても、愛しあうことができる未来に夢に心おどらせ…。

アイルハルトが上記シーンで用いた菩提樹の木をゴットフリートは実は有名な愛の洞窟のシーンで使っている。恋人たちの理想的な愛の夢を描いて名高いあの場面である。トリスタンが偶然狩りの途中で見つけた巨人たちが遠い昔愛の営みをしようと思った時に、そこを隠れ家としたという例の洞窟である。青銅の扉で閉鎖され愛の女神に奉納された、恋する人たちの洞窟というものを描くシーンなのである。

周りの壁は平らで、凸凹がなく、純白であった。円天上は上で見事につなぎあわされていて、上の要石のところには王冠がったが、金銀細工で大変美しく飾られ、宝石が見事にはめ込まれていた。また下の床には草のように青い大理石がしいてあって、それは、、、中略　そのまん中には水晶を見事に彫って作った高くて、広々とした清らかな寝台があって、その周りに彫りつけた文字はこれが愛の神に捧げられた旨をしめしていた。…（中略）そしてその外にはこのいり口の前に枝の茂った菩提樹が３本立っているだけだった[19]。(Gottfried von Straßburgvv.14687-14725)

この場面ではもちろん菩提樹はトリスタンとイズー２名の理想の愛を成就する夢の場所として描かれている。菩提樹はこのカップルの理想の愛の象徴であり、３本という数字にも意味がある。リバール氏も指摘しているが[20]、ローランの歌の勇士がオリヴィエ、ローラン、チュルパンと聖戦を戦う三身一体であったし、聖杯の探索者はガラード、ペルスヴァル、ボルト（Boort）と３人なのです。完全は数字として３本の菩提樹に守られるこの洞窟はまさに二人の夢を実現する場所として用意されたものなのだ。

Ⅲ　夢の終演

さていままで見て来たこの物語りに描かれらた美しい夢の終演はどういうシーンでしめくくられるのであろうか。トマのなかではもちろん２名の墓のシーンはない。

Embrace le, si se estent,
Baise la buche e la face
E molt estreit a li l'enbrance.
Cors a cors, buche a buche estent,
Sun espirit a itant rent,
E murt dejuste lui issi
Pur la dolur de sun ami.
Tristrans murut pur sue desir,
Ysolt, qu'a tens n'i pout venir
Tristrans murut pur sue amur,
E la bele Ysolt par tendrur.
Tumas fine ci sun escrit :

Elle le serre dans ses bras et s'étend à côté de lui.
Elle lui baise la bouche,le visage
Et le tient étroitement enlacé
Elle s'étend corps contre corps, bouche contre bouche
Et rend l'âme
Elle meurt ainsi à côté de lui
Pour la douleur causée par sa mort.
Tristan mourut par amour pour Yseut
qui ne put ariver à temps.
Tristan mourut par amour pour elle
Et la belle Yseut par sa tendresse pour lui.
Thomas achève ici son histoire[21].

(Thomas manuscrit sneyd 2 vv.29-38)

亡骸に腕を回し、横に身を延べると、
その唇と顔にイズーは口づけし、
そこからこれをひしと抱き締める。
体と体を、唇と唇を合わせて横たわり、

そのまま息を引き取った。
恋人の死を悲しんだため
その横で死んだのであった。
トリスタンはイズーへの愛ゆえに死んだ。
イズー来るのが間に泡なかったために。
トリスタンはイズーへの愛ゆえに死んだ。
そしてイズーは優しさのために。
トマはここにこの書物を終える。（Thomas vv.809-819）

トマは最初から二人の恋人が愛しあっているという説を取っているので、最後まで二人の理想的な終演を描くことのみに力をそそぐ。しかしベルールや後の物語の元になったといわれるエストワールを受け継ぐアイルハルトでは当然違った場面が描かれている。
アイルハルトは終演につぎのような詩を付け加えている。

man sagt dar ab,
man ward mir gesagt alsuß zwar
und kunig ainen rosenbusch dar
ließ setzen uff daß wib
und ainen stock uff Tristrandß lib
von ainen winreben.
die wochsen ze samen eben,
daß man sie mit kainen dingen
mocht von sie ander bringen

On dit
On m'a raconté comme un fait authentique
que le roi fit planter un rosier
sur le corps de la femme
et sur celui de Tristan
un cep de vigne.
De taile éale, ils entrecroisèrent leurs rameaux
si bien qu'en aucun façon
on ne put les séparer
（Eilhart, vv9510-9517）[22]

伝えられているところによれば、
女性の骸の上に
王は一本のばらの木を
そしてトリスタンの上にはぶどうのの幹を
植えさせたもうたとか
同じ高さのところから２本の木は枝をのばしからめあった。
そんなにも上手にからめてあるので、どんなに
引き離そうとしてもできなかったとか。（Eirhalt vv. 9510-9518）

ばらの木にはそのトゲのイメージから我々にキリストに被せられたいばらの冠を思いださせる。イズーの長くはてしなかった悪人との葛藤と苦悩を何よりも表すものではないだろうか。そしてまたぶどうの木は、彼らが口にし、そのためにかくも長い辛酸をなめることになったあの薬草入りの飲み物（vin herbé）を思いださずにはいられない。長い長い彼らの苦しみをあらわすのに、これほどふさわしい木もないであろう。そしてまた我々にあの創世記始めて植えた木がぶどうの木であったことを思いださせる。人類に始めて収穫の喜びを与えてくれた木はトリスタンにイズーとの甘美な美しい愛の陶酔に酔わせる完全なお膳立てを用意しているといえよう。最後に、サガのこの場面ではならの木（chêne）が使われていたことを付け加えておこう。中世ヨーロッパの森はこのならとぶなで覆われていたといわれるが、ならはドルイド僧にとっても、大切

な木であった。ドルイド僧が新年を迎えるために村びとに配った宿り木の枝もこのならの木にまきついたものであった。命の象徴だったのである。７つの聖なる木であると同時に目に見えない力と長寿を意味するものであったのだ[23]。聖ルイが王国の裁判をこの木の下でしたいと願ったのもこの木が英知を意味するものだったからなのだ。この物語りの終演をこの木で飾った訳者ロベールの意図は明白だ。この哀れな恋人だちの愛が永遠に続くようにとの願いが我々にも届いてくるように思われる。

結び

以上見て来たようにマットレ氏はその著「中世の語彙」[24]中で、「中世において木にはみるべきところはあまりない」と述べていたにもかかわらず、ずいぶん多くの意味とイメージが隠されていることは明白な事実であり、それを知ることは非常に興味深いことであるということも理解されるであろう。

木によって紡がれ、織られたこのトリスタンの物語り群は人々の夢とヴィジョンを木に託すことでますますそのイメージは広げられ、美しい詩に昇華されるということが理解されるであろう。今回取り上げたのはトリスタンの物語り群のみに限ったのだが、それは他の作品に比較し、よりプリミテイヴなイメージを多く持っているし、ドルイド僧や原始の森のイメージをより多く残しているものだと考えたからであった。次回他の作品の中にどのように展開されるのかをみてみたいと思う。

註

1 Marie de France : *Lais de Marie de France* Lettres gothiques, 1990
翻訳はマリ　ド　フランス著月村辰雄訳「12の恋の物語り」岩波文庫1988

2 Robert-Jacques THIBAUD *Symbolique des Druides dans ses mythes et legendes*.
Ed.Dervy, 1997, p.64

3 Ibid : p.67

4 Op.cit : Marie de France : Lais de Marie de France
マリ　ド　フランス著月村辰雄訳「12の恋の物語り」

5 Op.cit : Robert-Jacques THIBAUD p.71

6 Op.cit : Robert-Jacques THIBAUD *Symbolique des Druides dans ses mythes et legendes*.
p.66-67

7 Béroul : *Le Roman de Tristan*, Droz, 1960
Béroul : *Le Roman de Tristan* traduit et présenté par Philippe Walter,
Lettres Gothiques 1989
ここの引用は後者を使用　p.127
翻訳は天沢退二郎訳「フランス中世文学集１」白水社を使用

8 以下を参照のこと　Thomas : *Les Fragments du Roman de Tristan*, Droz, 1960
Thomas : *Le roman de Tristan*, édité par Félix LECOY Champion 1991

9 シェークスピア著、小田島雄志訳「夏の夜の夢」白水社　1983

10 Béroul : *Le Roman de Tristan* traduit et présenté par Philippe Walter, op.cit.p.p.
翻訳は天沢退二郎訳「フランス中世文学集１」白水社を使用

11 佐々木茂美「中世フランス文学論文集」第２巻（邦文篇（１）「人間は樹木のごとく…」(pp.320－357）参照

のこと　明星大学出版部　2003

12　Op.cit : Robert-Jacques THIBAUD *Symbolique des Druides dans ses mythes et legendes*. p.

13　Ovide : *Les Métamorphoses* op.cit p.125

14　*La chanson de Roland* présenté et traduit par Jean Dufournet Flammarion 1993 p.98
翻訳は佐藤輝夫訳「ローランの歌と狐物語り」ちくま文庫　p.46

15　Eilhart von Oberg : *Tristrant* édité des manuscripts et traduit par Danielle BUCHINGER Verlag Alfred Kûmmerle, Gôppingen 1976 pp.270－271
翻訳は筆者

16　Ovide : Les *Métamorphoses* op.cit pp.81－85

17　Gottfried von Straſburg *Werke* I　Georg Olm Verlag, Hildesheim　2003
ゴットフリート著石川敬三訳「トリスタンとイゾルデ」　郁文堂　1992 p.250

18　*La Bible Ancien Testament* Pléiade, Gallimard 1956 p.25
翻訳は筆者

19　Gottfried von Straſburg *Werke* I　Georg Olm Verlag, Hildesheim 2003
ゴットフリート著石川敬三訳「トリスタンとイゾルデ」　郁文堂　1992 p.p.286－287

20　Jacques Ribard : *Le Moyen Age Littérature et symbolisme* Champion 1984 p.p.16－17

21　Thomas : *Le Roman de Tristan* traduit et présenté par Philippe Walter, Lettres Gothiques 1989 p.482
翻訳は天沢退二郎訳「フランス中世文学集１」白水社を使用

22　Eilhart von Oberg : *Tristrant* édité des manuscripts et traduit par Danielle op.cit.p.p.756－757
翻訳は筆者

23　Op.cit : Robert-Jacques THIBAUD p.69

24　Georges MATORE : Le Vocabulaire et la Société Médiévale PUF 1985 p.255